

# 読書は人生的態度を決定する

住 谷 悦 治

（本稿は、チャペル・アツセンブリー・アワーにおいて講演されたものを講演者の承諾を得、一部省略加筆して掲載した。）

何を食べようか、何を飲もうかと自分の命のことで思いわずらい  
何を着ようかと自分のからだのことで思いわずらうな。

命は食物にまさり、からだは着物にまさるではないか。……  
まず神の国と神の義とを求めなさい。そうすれば、これらのものはすべて添えて与えられるであろう。

（マタイによる福音書第六章二五―三四）

## 大学の教育目的と心構え

讚美歌の中で「ひかりの中をあゆめ」という言葉がありました、私の学生時代にトルストイの“Walk in Light”という随筆を読んだことを思い起こしました。ちょうど私が今からお話したいと思っております「読書」ということと結びついてきます。「ひかりの中をあゆめ」とは、何もクリスチャンの独占語ではなく、全ての人々

の普遍的な考え方であります。同志社は新島先生がいわれたように、キリスト教徒、牧師、宣教師を養成するためにあるのではなく、むしろ社会に有用なる人物を輩出することがその目的としてあるのです。そういう点を誤解しないでいただきたい。クリスチャンでなくても、クリスチャン精神というものは普遍的なものをもっていると思います。それが同志社の目的の根底に根づいていくものであることを願っているのです。またそのような精神が今日の大学教育の目的ではないかと、私は考えております。

これから、読書の重要性を述べるのですが、新しく入学された皆さんに、まず大学教育の目的と大学生生活四年間に対する心構えとについて、一言申しておきたいと思っております。結論を先に申し上げますと、次のようなことです。大学は、ギリシヤ以来の知識を継承し伝達していくこと、これが大きな目的の一つであります。第二は、その過程において、創造的な精神を、しかして人生に対する生甲斐

を、学問研究を切磋琢磨することによって獲得していくところであります。第三には、国家社会に有用なる人物を輩出するところである。教養を蓄積するだけではなく、それを生かす。つまり実践的な教養人になるということです。新島先生の言葉によれば、「良心を手腕に運用」することです。

このような大学教育の目的に、教授と学生が責任をもって応答していかねばなりません。教授は学者であると同時に教育者であり、さらに社会人としての使命と役割をになっておらねばならないであります。またそのことを、学生は授業においてあるいはいろいろな活動において絶えず真剣に批判していかねばならぬと思います。学生運動が盛んになっている今日の状況下において、教授と学生とによる大学教育の目的についての論議が真に要求されてきているのです。この過程において教授はその教授としての資格が与えられていくものなのです。

学生としての立場は、第一に真理探求に熱意をもつことです。具体的には質問をおそれはありません。マスプロ教育はいけないと叫ぶまえに、このことが要求されるでしょう。そこから出発するものでなければ、マスプロ大学批判は現実性をもたない。同志社の創立期の先生であったラーネッド氏に、学生たちはあれこれと質問すると、先生はよく「I don't know」といわれた。学生たちは、われわれはお金を払って偉い先生に学んでいるのだから質問に答えてもらいたいといった。すると先生は、天地の間、人間の知るところははなはだわずかです、と答えたといわれております。学生の質問に答えられなかったところを先生は調べて、そして一つ一つ答え

られたそうです。深い知識をもっておられたラーネッド先生の学究の徒としての実に謙虚な姿を物語るものでありましょう。自分の知らぬことは他人もまた知らぬ場合が多いのですから、たとえ愚問と思えるものでもそれを恥じてはならず勇氣をもって質問を教授に投げかけていつて欲しいと思います。第二は、学生は研究の過程において鋭い批判力をもつこと、付和雷同を排して、何が善か何が悪かを正しく判断する批判力を養うことです。第三は、高い教養を身につけることです。専門学部外のことを知らぬというのでは大学生としての知性に欠くものであります。広い教養の上に深い知識が築かれていく。ピラミッドの素晴らしさと富士山の美しさはその底辺の積み重ねと広がりの上に立脚していることを例として考えればいでしょう。これらが大学生としての務めであり、その立場から教授を批判していいのです。そういう意味において、学問への厳密な態度が出てまいります。このことを前提として、大学教育の目的を教授と学生は追求していくものであると思います。そこにわれわれの志向性と方向性があります。

### 読書の基本的方法

それには、種々の達成の道がありますが、その一つとして読書というものがあります。それが重要な役割を果たしている。ある意味で青年時代の読書内容がその人の人生を決定づけるといってもよいであります。

一般的には読書とは精読ということをいう。第二は素読、つまり

意味理解をあまりせずに文字を追ってみることに。第三は、通読です。これは全体を軽く読み通して、しかもその概要を把握することです。素読と通読とは多読に結びつく。根本的には精読熟読すること、そして多読することであり、読書の高さや広さを得るためでもあります。そういう一般の態度の次に要求されるのは、何を読むかということが考えられてまいります。これが非常に大切な重要問題です。

皆さんは馬車馬のような受験勉強からやっと解放され、自由に読書する機会を得たのですから、先生に何を読んだらいいかと聞いてみたり、また古本屋をのぞきまわってみて書物を選択していいでしょう。また同志社の図書館には、六十万冊の書物が並んでいますから一つ一つあさってみてもよいのです。ところが下手をすれば、ちよっとの思いつきで雑本を買って途中で読み捨てることが多いものです。親からいただくお金を無駄に使ってはなりません。私などはこの年になりますと、本を買うのは相当選択をいたします。しかしともかく、最初は先生等の指導によって半強制的に本を読まされていくことが大切であると思います。それをやっている間に、自ら本を選ぶ見識が生まれてくる。そしてそのうちに自分の人生を決定づけるような良書に出会うようになると思います。もし、皆さんがそのような良書に出会うようになると思えば、皆さんがそのような良書に読書における幸福者となることでしょう。

ではどのような本を読んでいくか。人によっていろいろ違った文献をあげられることでしょうか。一般的に言って、良書を読むということが肝心だろうと思います。良書とは何か。日本人は、大きな本を読むのが不得手であるといわれております。多読をするが、大

きなのを読めない。例えばトルストイの『戦争と平和』を通読した人があるでしょうか。非常にわずかです。あるいはマルクスの『資本論』を熟読とまでいかずとも通読した人があるでしょうか。

『資本論』第一篇第一章は商品の分析です。「資本主義社会は膨大な商品の蓄積として表われる。ゆえにわれわれはまず商品から研究せねばならぬ」と示されている商品の分析から、それは始まるのですが、非常にむづかしい。ゾンバルドは、「資本論を初めからかじりついて読むと前歯を折る」といっております。ことに商品の価値がむづかしいからです。商品の価値は労働力によって形成される。それは個々別々の労働力ではない。一般的社会的必要労働であり、その集積として商品が表われるのです。しかしそれがなかなかかわからなかった。幾度も幾度も読み返さねばなりません。ですから、『資本論』を読むには何らかの手引が要求せられるでしょう。同志社の経済学部教授でもそれを通読した人はわずかです。まして学生でも、私の四十幾年かの教授生活で、『資本論』を熟読した方に出会ったのは二人か三人であろうと思います。通読した人は十人程度でしょう、私が知っている範囲では。

それはともかくとして、外国では語学の関係があるからでもありましようが、大きな書物を読む人が多い。例えば、『ジャン・クリストフ』（ロマン・ロラン）とか『戦争と平和』、あるいはルソーの『エミール』といった本は家庭に備えられているのです。そのようなわけで大きな本に喰いつくということを恐れない、しかも漫然でとはなく出来れば大きくて良い本も読むことが必要であります。

## 読書が人生的態度を変える

小説であろうと、また論文随筆であろうとも、青年時代に読んでいた書物を十年後あるいは数十年後に読み返すと、また新たなことがらを教えられるのであります。青年時代に記された書物上のアンダーラインや、欄外のメモをもう一度見直してみると、年とともにかわっていった自分の思想の過程をたどることもできるのであります。

皆さんは全身全霊を注ぎこんで書物に向ったことがありますでしょうか。私の高等学校時代の校歌に、「孤灯の下に衿正す、夜半の窓の影ひとつ、天地寂たる只中に、泣きても慕う代々の跡」というのがありました。これは土井晩翠による作詞です。われわれはほんとうにこのような体験をいたしました。読書によって、人生的態度が変えられていったのです。それにつけて思い起こしますのは岡上守道という政治学者であり、また、朝日新聞の記者で海外で活躍した人のことです。その人は実に丹念に書物を読むとその欄外にこまごまと自分の考えたことを書きつらねていきながら読む人であった。氏は、オッペンハイマーの『国家論』(Der Staat)を幾回も読んだ結果、人生観、社会観が全部変わったといわれております。一冊の本によって人生観、世界観が変わってしまうほど熟読されたというわけですね。

私のある友人は、内村鑑三の『余は如何にして基督教徒となりしか』を読んで自分がすっかり変えられたと言っております。内村の書

物を読んで、あるいは内村の話聞いて心を交えられたという人は数多くいらっしゃると思います。文章は簡潔で立派です。ことにその話には実に魅力的でして、学生時代に内村先生の話を聞いてからはキリスト教の偉い人の話を聞く気がしなくなりました。一高の教授であった時に天皇に対する不敬罪で追われ、京都に来て『基督教信徒への慰め』という名著をあらわし、またその後『聖書の研究』という雑誌を発行し続け、無教会主義に立ってキリスト教信仰を貫いた偉大な思想家です。矢内原忠雄先生も彼の弟子として影響を受けた一人です。たしかに内村は国賊として、ののしられたがそれに屈することなく闘い抜いた人です。その氣迫たるや実に彼の強靱な精神、信仰から発したものです。国賊と呼ばれたり左翼ときめつけられたりすると、戦前の日本ではほんとうに自分の立つべき場を根底から奪い去られる運命にあったのです。私は戦前、治安維持法でもって同志社を辞めねばならぬことがありましたものですが、内村先生に比べると実に小さなものですけれども、世の権力と闘い続けることがいかに困難であるかということを感じております。ですが、忘れてならぬことは、内村先生もまたそのような果敢で真実な歩みが、一冊の『聖書』との出会いから開始したものであったということです。一つの書物を読むことによって人生的態度が変えられる、そのぐらいでなければ読書したことの意味がなくなると思います。良書に出会い、そのように自己変革される時、さらにその本は一段と自分より高く見えるものでありうと思えます。そういう書物に出合ったならば、あなたの愛読書となるのです。

(同志社総長)

# 校長就任におもう

浦野信夫

(同志社高等学校校長)

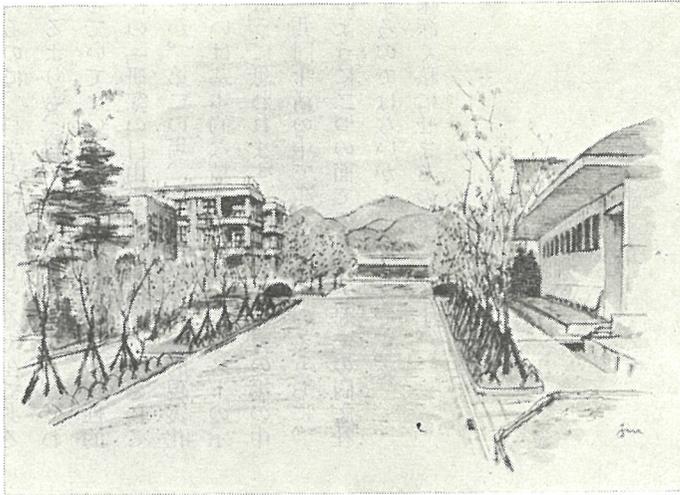
昭和三十八年、同志社高等学校の所謂管理棟ができて柏心館と名付けられ、それ以前に既に建っていたチャペルと、間、約六百坪のところを中庭にし、その中央を東西に走る道路に沿って三列の櫛の苗木が植えられた。今それが一面に木陰をつくる程成長して、全く時間というものの力を感じさせます。既に秋の気配をもった青い空、赤いチャペルの屋根、櫛の緑の林、それらが校長室から見えます。校長室の私の机を窓に向って置きたかったがそうすると入口に背を向けるので、右向けば入口、右向けば窓という位置に置いてやっと落ち着いた恰好です。「もの言えば口唇寒し秋の風」。活字になることを述べることに躊躇するというのが私の正直な気持ですが、それは言論の自由が圧迫されているということではなくて、(形式的には言論の自由は尊重されているが)逆にマス・メディアの発達した現代、マス・メディアの虚構の乱造とその圧力、それが現代の不幸な宿命の一つと思っ

ているからです。しかし所感ということなので気楽に自己主張をさせてもらうことにします。

私学という特質を確立されるべくせまられている同志社を考えます。建学の精神とされ

ている「キリスト教を徳育の基本とする」ということと、一般的な学校という機能と、どういう風にかみあわせるかが問題になると思います。

その点を明らかにするために私はまず教育という機能の働く場を二つにわけて考えます。第一には過去より積み上げられてきた諸々の文化遺産、知識を修得し発展させる機会を与える。第二はその中から、あるいは、その中から派生するものの中から、選択が行なわれ、人間としてのあり方を規制する。其処に人格の現実化、(ある意味で)社会化が果たされる。この二つの場で同志社の私学としての特徴が発揮されるにはどうかかわりあいがあるだろうか。私は思いますに、第一の場では知識の幅の広さと発展的可能性を拓げるため、限定的性格を排するということが必要です。キリスト教的愛と寛容の主体的な実存がそれを可能にしたいと思います。人間の知の相対性を訓えるイエスは無限の否定を示唆しているのではないのでしょうか。私は此処で次のようなことを言っているフランスのある学者の考えを想起します。「理性——それが科学的に思考する能力以外のものである



ならば——というものに異議が申し立てられているのに、科学とは認識しうる実在であるという理由だけで、現代では理性が科学を規定するよりも、科学で理性を規定する。」われわれは現在までにつくられた科学だけに満足してよいものかどうか。無限の理性的能力の可能性を守るべきではないか。そして学校の「研究の自由」という権利はまさにこの点において主張されうる根拠をもつのではないか。第二の場、即ち人格の社会的現実化における選択が行なわれる場合、基本的原則あるいは基本的な精神として、キリストの示す愛と寛容が働くことに同志社的な意味があるように思われます。具体的な教育の場の中に示されるものとしては、これは概念ではなく、共同生活の中で生きられているうちに、まさに培われるものであること勿論ですが、このように二つの面での科学としての同志社の特殊性と一般性の一つの弁証法的発展が成立するのではないかと思うわけです。こういう意味で私は常々、聖書の次の句が意味深く私にせまるのを感じます。

ヨハネ八章 二十三節

イエスは彼らに言われた。

「あなたがたは下から来たもの

だが、わたしは上から来たも

のである。あなたがたはこの

世のものであるが、わたしは

この世のものではない」

(四十六、八、四)

## ■ 大塚英雄

(同志社香里中・高等学校校長)

このたび生島前校長の後任として就任してから、すでに五ヶ月、浅学不才の私、伝統ある学園の運営の責の重きをおそれつつ、早くも第二学期をむかえる時期になりました。本校はことしで、同志社香里中学校、高等学校として開校されて二十年、京都の今出川の学舎が九十六年の歴史を刻んでいるのに比してまことに浅い年月ですが、同志社創立建学の趣意、天籠のもと、年輪深い栄光のもとに、歴代の校長を中心とする教職員の熱意、生徒の自覚、そして父兄、さらに卒業生各位、関係諸方面の協力と援助によって、今日の同志社香里が育って来たことを感謝せざるを得ません。「百年の計は人を植えるにあり」と教育の道、かぎりなく遠く、私ども教育に当る者のその力の不足不備を思うものであります。すがこの学園が少しでもより充実した学園に導かれることを念願するものであります。それについても関係各位各方面のご教示ご鞭撻をお願ひ申しあげる次第であります。

同志社は「……ただ学問を教授するばかりでなく、個性を養い、品性を高め、精神を正しくし……また、ただに技術や才能ある人物を教育するにとどまらず、良心を手腕に運用するところの人物を送り出さんとす」と。新島襄先生の教育の抱負がうかがえます。さ

らに先生は単に知的教育のみに偏することをいましめられ「……神を信じ 真理を愛し隣り人と和するキリスト教の道徳によらなければならぬことを信じて キリスト教主義をもって同志社教育の基本とする」と述べられました。

今夏 キリスト教学校教育同盟主催の研究集会の主題は「キリスト教主義学校は変わったか」で 今年で三年ごしの研究題でした。この主題は数年前の学園紛争が動機となった向きがあるわけですが 根本的にキリスト教学園の今日における意義 機能 苦悩などが述べあわれたのでありますが それぞれ各校現状の反省と深い思索が求められたことでした。「少しも変っていないではないか」「変って来ている」など主題の内容のとらえ方で答も異なったものがあるわけですが「変ってはいけないのではないか」という意見もありました。さて同志社の場合 同志社教育の精神は変っていない。変る必要はないと思いません。不変の真理 道 神のそなえ給う法則を探求する学園として 不変不動といえないでしょうか。

昭和三十年の同志社創立八十周年の記念式で徳富蘇峯先生は新島先生の印象と教育観などについて語っておられますが「……先生の教育は人間教育であった。人間学を教えられた。一国の良心となる人 無名の英雄 奉仕の精神で生きる人 そのような人物を先生は望んでおられた……」 また新島先生の意図が世相時代とともに押し弘められなければならぬことを強調され「……後輩や学生が新島先生の提灯に頼るのでなく各自に立派な提灯をつけて歩け 自分の足元を正しく照らすばかりでなく 世の中もその提灯の光で導くような人になれ ……同志社がただ わが仏尊しとばかりで……先生をお札のように考えて偶像として奉りさえすれよというようなことであれば 先生の最も痛恨されるところでであろう ……先生の教えを標準として それに新らしい時代 世相 環境に対し

て押しひろめてゆくことが先生の願いであった  
と思う」と。

時代をこえて不変のもの 時代に即して改む  
べきこと 深い洞察のこれらの尊い教訓を胸に  
抱いて努めてゆきたいと思っております。

讚美歌

時代の風は 吹きたけりて

思想の波は あいうてども

すべての物を 超えてすすむ

主イエスの国は 永久に栄えん

\*

(四十六・八月末)

\*

